

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題(和文)	知財見聞録, カンボジアの悲惨な歴史に触れて
Title(English)	
著者(和文)	田中義敏
Authors(English)	Yoshitoshi Tanaka
出典(和文)	発明, Vol. 116, No. 7, pp. 16-17
Citation(English)	THE INVENTION, Vol. 116, No. 7, pp. 16-17
発行日 / Pub. date	2019, 7



知財見聞録

カンボジアの悲惨な歴史に触れて

東京工業大学 工学院 経営工学系・経営工学コース 教授 田中 義敏

再度のプノンペン訪問は悲惨な歴史と現実との交錯

本年3月に2度目のプノンペン訪問の機会を持つことができた。3月号では9～13世紀ごろ、世界文化遺産に登録されている「アンコール遺跡」を建設し、当時、広大な領土を保有していたクメール王国（カンボジア）について解説したが、今回は20世紀後半の悲惨な歴史に触れたい。東南アジアで最も悲惨な歴史を背負う国の一つ、カンボジアへの思いを新たに帰ってきたので、報告する。

ポル・ポトが打ち立てたクメール・ルージュ

第二次世界大戦前のカンボジアはフランスの植民地政府が統治していたが、1940年から日本軍が進駐。戦後、再びフランスの支配を受けるが、53年にカンボジア王国として完全独立を果たし、シハヌークが国王に就任した。しかしながら国外列強からの影響を強く受け、また国内統治は遅れて内戦状態に陥り、70年代にはポル・ポト派（いわゆるクメール・ルージュ。ただし、厳密にはポル・ポト派、クメール・ルージュ、カンボジア共産党はそれぞれ区別されるようだ）が台頭してくる。

「クメール・ルージュ」といってもそれを知る日本人は少ないが、ポル・ポトと聞くとカンボジアで酷いことをした人物と知る人は多い。ポル・ポト

（1928～98年）はカンボジアの政治家で、76年4月の首相選出後、非共産党の政府指導者を徹底して排除し、カンボジア共産党中央委員会書記長を務めた。クメール・ルージュの精神的指導者になったことで知られている。

75年から79年にかけてのカンボジアはポル・ポト派の支配下で虐殺が行われ、当時総人口800万人足らずと推定される小国で、実に、200万～300万人近くが命を落としたとされる（人数については諸説あり）。

トゥール・スレン虐殺博物館

休日にプノンペンの友人がトゥール・スレン虐殺博物館（Tuol Sleng Genocide Museum）に案内してくれた。ここはポル・ポトの時代に、プノンペンに設置された政治犯収容所を博物館に転用した施設で、多くの虐殺が行われた場所である。かつて拷問に使用されていた部屋や器具などがいくつも残されており、拷問の様子や収容所で亡くなった方の写真も数多く展示されていた。

多くの西洋人が見学に訪れていたが、誰もがあまりの残酷さに手で口を覆うほどであり、筆者も建物内で「こんなことがあったのか」と信じられない光景を目の当たりにして悪夢を見ているとしか思えない心境であった。しかも、それらはわずか40年ほど前の出来事である。当時を知る生き証人は

どのような思いだろうか、全く想像もつかない。

S21はコードネーム

博物館の建物は元タリセ（フランスの後期中等教育機関で日本の高等学校に相当）の校舎であったが、クメール・ルージュが1976年4月ごろ、反革命分子を尋問し虐殺するための施設に転用し、“S21”と呼んだ。プノンペン市内の他の政治犯収容所が次第にS21に集約されるとともに、一度収容された者は生きて出ることはない場所になっていったようだ。

S21という名称はコードネーム“Security Office 21”の略称。ポル・ポト時代は存在そのものが秘密であったため公式名称はなく、博物館にする際、トゥール・スレンという地名を用いたようだ。

生還者との出会い

S21では1万2000人もの人々が収容され、そのうち生き残った成人は、たったの8人といわれている。館内で生還者の1人と会うことができたので、言葉を交わし記念写真を撮ってきた。その方は毎日のように拷問を受けていたが、拷問係が収容者の自白を記録する際に用いるタイプライターの整備工として引き抜かれたために生き延びることができたようだ。

「拷問係も犠牲者の一人だ。幹部の

命令に従うしかなかったのだから。多くの人が殺されたなかで自分だけが生き残った事実を長年悩み続けた」という話を伺ったが、胸の内を推測することは困難であった。最後に、「いつまでもお元気でいてください」と声を掛け握手をした。

クメール・ルージュを巡る世界の動き

クメール・ルージュによる虐殺行為は3年間ほど行われた。その後、間もなくベトナム軍によってS21の存在は白日の下にさらされる。

ソ連(当時)、中国、米国、イギリス、東南アジア諸国、日本など世界各国は、このクメール・ルージュをどう見ていたのだろうか？ 歴史に^{ほんろう}翻弄されたカンボジアの姿がさらに気の毒に見える。

すなわち、ベトナムのカンボジア侵攻についてソ連はベトナムを支持する一方、中国はクメール・ルージュを支持したため、この侵攻は中ソの代理戦争と化していたし、ベトナム戦争後もベトナムを敵視した米国とその同盟国であるアセアン諸国や日本を含む西側諸国は、クメール・ルージュの国連でのカンボジア代表権を支持・承認している。イギリスについてはイギリス陸軍特殊空挺部隊がクメール・ルージュの訓練を行っていた。このような政治事情により、クメール・ルージュの暴挙が国際的非難を免れる局面もあったという。

内戦が終息した後、1992年3月から国連カンボジア暫定統治機構による統治が開始。ようやく、93年5月に国連の監視下で民主選挙が実施されたが、クメール・ルージュはそれらを拒

絶し、活動を続けていた。しかし90年代後半になると、党派内の争いで失脚していたポル・ポトが98年4月15日に死去し、クメール・ルージュも弱体化していった。

心の共有

筆者の訪問中には日本人観光客らしい方に出会わなかったが、ポル・ポト政権時に何が起きていたかを知ることができる場所が今もそのまま残っていることを知っていただきたい。カンボジアを訪れる際には世界遺産のアンコールワットに限らず、ぜひ、トゥール・スレン虐殺博物館にも足を延ばしてほしい。世界の出来事にも目を向け、カンボジアの悲惨な歴史に思いをはせ、国の復興と成長に^{まいしん}邁進する同国の方々と少しでも心を共有する時間を持っていただけたらと思う次第である。



S21の生還者から貴重な話を伺った



トゥール・スレン虐殺博物館